報復

叫べば叫ぶほど空しい灰色の平原に
乾いた煙が力なく流れ出てゆく・・・
何と決まりきった運動の繰り返しか

突き上がる生命の小っぽけな自己主張は
世界から無視されてたまらずに
泥をはね上げながら狂って駈け去ってゆく

日は昇り、沈み、また行儀よく昇り
私の下賤な感性がその度に慄え
私の弱々しい生命がその度に衰える

奴隷の如き世界は自由な意思を憎み
無限という奈落を私の目の前に突きつけ
諦めを強いるために花を咲き乱れさせる

これより時は歩みを緩めるだろう
耐え難い一日の長さが私を引きずり
ああ、私は死を希ってのろのろと歩き続けるだろう

(1985.3.21)